
光

冷鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光

【Nコード】

N2795B

【作者名】

冷鬼

【あらすじ】

真が今まで体験してきた事です。裏切りや人間関係。メンタル。同性愛。援助交際。虐待。暴力など

家族（前書き）

これはノンフィクションです。少し過激な表現もありますが理解お
願いしますm（　　）m
感想もお願いします。

家族

これは、真が今まで体験してきた物語です。

真にとって大切な人達は生きていく上で大切な存在と生きていく上で一番邪魔な物だった。

「産まれた」と医者抱きかかえたのはそう、真だった。

生まれる前は「男の子ですね」と言われ産まれて来た子はなんと女の子。

明子は女の子が欲しかったのでとても喜びその子に真と言う名前をつけました。

守と明子と産まれたばかりの真と三人はとても幸せそうに、見えていたのだが、

守は 酒乱で酒を飲んで明子を殴っていました。

守は、仕事もまじめで暴力を振るうなんて誰も信じなかった。

明子は、真を実家に預けスナックで働くようになった。

真の三歳の誕生日に真の好きなドラえものの誕生日ケーキを買って三人でお祝い。

数日が立ち、明子が友人の恵子に守の暴力の事を相談した。

半信半疑の恵子は妊婦にもかかわらず明子の家に泊まりに行った。

何事もなく過ごしていた真、恵子、明子達。

「ただいま」

その時、少し酒の入った守が帰って来た。

恵子と明子は「お帰り」とニコニコしながら守に言うのと、

「ただいま」と言いながらいすに座り酒を飲む。

すぐに、酔い始めた守は日ごろの愚痴をこぼし明子に掴み掛かった。

そして明子は殴られながらも真を必死に守る。

そして守は明子の友人の恵子のお腹を蹴る。

それを見た明子は三人裸足のまま、守から逃げ明子の実家に戻った。明子と守は離婚をし、明子はスナックで働きながら実家で暮らすようになった。

物心ついた頃に真は明子に

「お母さん、パパはどこ行っただの？」と守の事を言うようになった。明子は顔を曇らせながら

「パパは、トラックの仕事をしていて、事故でなくなったの」と真に言い聞かせました。

真が小学三年になったばかりの頃、もう一度パパの事を聞いた。ただし、

「お母さん、パパは本当に亡くなったの？」と、どうして言い出したのか明子には分からずようやく重たい口を開いた。

「真のパパは本当は生きてるよ。だけど、今は、会わせられない」とそれをいい終わる頃には、真は大粒の涙を流しながらパパと呼び続けていました。

胸が締め付けられるほどの痛みを抱える明子。

訳を知らされずパパに会わせて欲しいと泣き叫ぶ真。

その時期から祖父のゆきが体調を壊していた。そして、検査入院。毎日心配で見守る祖母の美佐江。少し痴呆が入ってる祖父母の菊。

祖父は癌だと宣告された。それでも、笑い続ける祖母。

明子は入院代を稼ぐ為にスナックから、クラブへ。

今日は、母の日。真はいつも仕事でいない明子に手紙を書いた。

「大好きなお母さんへ。あんまり飲みすぎないでね。タバコもだめだよ。

あと、真のこと忘れないでね。」と。。。。

これは、まだ小さかった真の素直な気持ちだったんだろう。
忙しいのに明子は真の為に時間を作るようになった。

そんな時家に電話が、「はい、もしもし。」と落ち着いた声で話す明子。

小さい真にはなんだかわからなかった。病院につき危篤の祖父を見た真は、

「おじいちゃん、おじいちゃん」と話しかける。

まだ小学三年の真には、夜は長かった。途中で眠くなり祖父母の菊に、

「ねーおばあちゃん帰りたいよ」とせがみ続けた。

そして、真は家につき深い眠りに。。。とその時真は夢を見ていた。

祖父が 出てきてにつこり笑い「頑張つてな」と言っていた。その時、祖父母の菊に起こされた。そして、また病院へ。。。

祖父は亡くなっていたのだ。真もそれが分かったのか泣き崩れた。

次の年明子は再婚。年下の男だ。

祖父が生きていたときはかなり反対されていたのだが明子の中に子供ができて結婚する事に。

、真は、ヤスの事がどうしても気に入らなかった。

「どうしてこんなやつが、パパになるの。」と明子に言い明子を困らせていた。

ヤスもあまり子供が好きじゃなかった。

いつのまにか、ヤスを「お父さん」と呼ばないと罰金百円取られるというのでできていた。

まだ小学生な真には百円はとても大切だったのでヤスを嫌々「お父さんと呼ぶ事にした。」

そして、真は中学に入った。明子のお腹にいた子も生まれ「明人」

と命名。

そして、真と明人は九才違いがった。

明人は母親も父親も持っていて甘やかされていた。

真はその頃から、弟を憎み始めた。そしてある日、明人が真の食べていたお菓子を取った。

たったそれだけで、真は今まで溜めていた気持ちを爆発させてしまったのだ。

小さかった明人の口を布団で塞いだり力いっぱい殴る。

それが、バレ祖母と取っ組み合いの喧嘩をした。

そして、テレビのリモコンで真の足を殴った祖母。

「痛い。。。 」と膝を抱える真。膝には小さなリモコンの破片が。。。

真に虐待を受けていても明人は真のそばを離れなかった。

真は、守の写真を見ながら会いたいと毎日泣いていた。

明子とヤスと明人は同じ戸籍。ヤスの養子になるのがどうしても嫌だった真は、旧姓を名乗ることにした。

家族なのに家族じゃない。複雑な気持ちのまま毎日を過ごし怒られると分かっているがらも弟の明人を殴り続けた。

そして、明子はそんな真に

「明人はまだ小さいんだよ。だから何で殴るの？」

と聞きました。真は明子を睨みながら目に涙を溜めて、

「真だってお父さん欲しかったもん。」

と訴えた。

明子は悲しそうな顔で黙り込んだ。

そんな明子を見つめてもう言っちゃ駄目だなと真は心に誓った。

そして真の虐待は終わることなく中学二年になり携帯を明子に買ってもらった。寂しさをまぎらわせる為に真は出会い系にアクセス。そしてゆうすけと言う名の男に出会う。

初。

明子は真が出会い系をしてるなんて思ってもみないだろう。

真は始めて出会い系にアクセスして書き込みをした！

ゆうすけは真の書き込みを見てメールしてきた。

「真ちゃんって言うんだよね！俺はゆうすけって言います。よろしくお願いしま〜す☆」

と明るいメールが来た。

真はすぐに返事を返した。

「メールありがとうございます！真って言います☆ゆうすけくんよろしく☆」

とたくさんメールをするようになった真。

メールが楽しくていつの間にか朝が来た。

笑顔で、

「いってきま〜す☆」

と言い真は家を出た。学校が近くなるにつれて足が重くなっていった。

教室に行き、友達に

「おはよう」

って言いに行き席につく。

次の時間は、社会だ。。。

真は、社会の時間が嫌いでもお腹が痛くなっていた。

クラスメートには仮病と言われたけどそれでも社会の授業は受けられなかった。

それは前に真が当てられた時に、答えられなかったのだ。

そして、一時間立たされていたのだ。。。

それをクラスメートはクスクス笑っていたからだ。

それから真は社会を考える度に体調が悪くなるのだ。

そして今日もまた保健室へ！

真は笑顔で

「先生おはよう☆」

とニコニコしながら言った！

それに笑顔で答える保健室の先生！

毎日保健室に行く真はたわいもない話をしたりするこの時間が大好きだった。

そして授業も終わり帰り支度している時にクラスメートの男子が真を見てクスクス笑った。

真は絶対自分の事で笑われてるんだと思い込み泣きそうになっていた。

「ただいま」

っと何事もなかったように笑いながら帰る真。

玄関にいる真が大切にしてるカメ達二匹にも

「ただいま」

と言い携帯の元へ。

ゆうすけにも

「ただいま」

とメールをするとすぐ帰ってきた！

「おかえり。俺は今からバイト。早く真に会いたいわ」

とメールが帰ってきた！

真は素直に喜んだ！

まだ純粹な真は人を疑う事はしなかった。そしてゆうすけと夏休みに会う約束をした！そしていよいよゆうすけと会う事に。

少し会うのが怖かった真は友達の恵里佳に話し着いてきてもらう事にした！

そして恵里佳とゆうすけの元に向かう電車の中で恵里佳と真は下ネタの話になった！

まだ恵里佳と真は経験したことがなかった。真の心の中には早く終わらせたいと言う気持ちが合った！

「みんなに置いて行かれたくないな」

と真は囁いた。

恵里佳は聞こえなかったのか真に、

「何って言った？」

と聞き直す恵里佳。

真は恵里佳の方を見て

「何でもない」

と笑う。

「何でもない」

と恵里佳は真を見つめて問いたです。

真はそんな、恵里佳に負けたのか話し始めた。

「自分はまだ初めて終わってないからみんなに置いてかれたくないなって思ったの」

とうつ向きながら話す。

恵里佳は

「そんなん気にしなくていいよ。やっぱり帰ろ？」

と不安そうな顔で覗き込む。

ゆうすけが待つ駅に着きゆうすけを待つ恵里佳と真。

その時、真は急に泣き出した。

何故か分からなかったけれど真は泣きじゃくった。

そんな時、お世辞にもかっこいいとは言えないような小太りの男が立っていた。

「真ちゃんはどっちなかな？」

と汗を吹きながらニヤニヤ笑うゆうすけ。

真と恵里佳は顔を見合わせる。

そして恵里佳は困った顔で真に言った。

「帰ろ？」

真は恵里佳を見つめ続けた。

それを見ていたゆうすけはイライラしながら

「まだ？早くして」

と真と恵里佳を見つめ眉を吊り上げてゆうすけは言う。

真は

一瞬間を曇らせたが心配をかけないように恵里佳に笑いかけた。

「行ってきまうす！恵里佳待っててね」

といつもと同じ明るい笑顔でゆうすけの元へ歩き出す。

恵里佳はそんな真を見て胸が苦しくなり名前を叫び続けた。

「真。真。まこと…ダメだよ…」
と。

恵里佳を気にする真を見たゆうすけはイライラしながら腕を引っ張り進んで行く。暫くして、真が口を開いた。

「あんなにメールしてたのに会うとなんだか緊張するね」
と少し照れながら話す真。

ゆうすけは真を見て黙ったままだった。

真は黙ってゆうすけの後をついて行った。

重たい足取りの真の携帯が鳴り響いた。

恵里佳だった！

「大丈夫？真早く帰っておいで。心配だよ」
と優しい恵里佳。

真は急に怖くなり帰りたいと思いつゆうすけの方を見たその時。

ゆうすけの重たい口が開き、

「ついたよ。」

真は辺りをキョロキョロ見回しました。

ついた場所はあるマンションだった。

ゆうすけはまた黙り込み真の手を引っ張り中歩いていく。

真は恵里佳のメールをずっと見続けた。

「ゆうすけくん、やっぱり…」

と言う真の言葉をさえぎるように、

「早くしろよ。」

と冷たくいい放つ。

真は恵里佳に

「大丈夫だよ☆心配するな☆」

と明るく振る舞うメールを送り携帯の電源を切った。

深呼吸をして、ゆうすけの部屋に入る。

ゆうすけの部屋は狭く汚かった。

布団と扇風機。タンスと積まれた洗濯物。

初めて男の部屋に入る真は何もかもが初めてで戸惑っていた。

真をゆうすけの隣に座らせ夢中で真の唇を貪り始めた。

真はキスをするのも初めての経験。

「ちよっ…待って」

と真は少し抵抗したがゆうすけの耳には届かなかった。

ドサツ…。真はゆうすけに押し倒されそのまま真は処女を捨てた。

痛いとも気持ちいいとも何も感じなかった。そんな真を見つめ笑い

ながらゆうすけは、

「本当に初めて？ってか今から俺バイトだから」

冷たい言葉と暑い部屋で真は何も考えられなかった。

残った物は後悔とお腹の上の白い液体。

無表情で白い液体をティッシュで拭う真。

そんな真などもう目には入っていないゆうすけはバイトへ行く準備

をした。

それからどうやって恵里佳の元へ帰ったかは覚えていない。

覚えているのは、携帯の電源を入れ、入っていた恵里佳のたくさん

のメールだった。

フラフラ歩く真を見つけ恵里佳は駆け寄る。そして何も言わずに恵

里佳は真を抱き締める。真は無感情だった。恵里佳が真に問いかけ

てもただ笑うだけだった。

その笑顔は痛々しかった。

真をこんな風にしたゆうすけが憎かった。

真の携帯を取りゆうすけに電話をかけたがゆうすけの携帯は電源さえも入っていないかった。

アドレスも変えられていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2795b/>

光

2010年10月11日21時57分発行